

被爆米兵調査 40 年——ある被爆者の人生行路

(US Prisoners of War in Hiroshima: A Forty-year Investigative Journey of an Atomic Bomb Survivor)

聞き手・まとめ：山口 響（長崎大学）

公開：2019 年 6 月 19 日

※本インタビューは、Journal for Peace and Nuclear Disarmament に掲載された以下の英語版の基になった日本語版である。両バージョンは、注の付け方などが一部異なっている。

<https://doi.org/10.1080/25751654.2019.1624308>

<要旨>

広島市在住の森重昭（もり・しげあき）氏は、1945 年 8 月 6 日に米国が同市に原爆を投下した当時、8 才であった。その時の経験で森氏が忘れられないのは、国民学校の運動場で原爆犠牲者の遺体が茶毘に付されていた様子である。投下から 30 年経ち、森氏は、学校でどれだけの遺体が火葬されたのかについて、調査を行った。また、後に同氏は、広島に抑留されていて原爆に被災した米国人捕虜の調査にも乗り出す。同氏の調査によって、これまでのところ、12 人の米兵の死亡が確認されている。本インタビューで同氏が振り返っているように、調査の道りはきわめて困難なものであった。しかし、2016 年 5 月、広島を訪問した米オバマ大統領のスピーチに森氏は招待され、40 年に及ぶ調査はひとつの達成を見ることになった。インタビューの最後の部分で、同氏は、大統領との出会い、2018 年の自身の米国訪問、最近の核情勢についても語っている。

1. 被爆直後

山口：お生まれは広島ですか？¹

森重昭：生まれたのはこの広島市己斐（こい）です。そのころは戦争の真ただ中でですから、ほとんど自由になることはなくて、毎日の生活ががんじがらめに縛

¹ インタビューは、2018 年 6 月 25 日と 10 月 15 日の 2 度にわたり、広島市のご自宅で行われた。

られておりました。お金があっても物をたくさん買えることはなくて、食べるもの、着るもの、全部配給制度になっておりましたね。田舎の方になると自給自足しているから、米や野菜もたくさん作って、裕福な生活ができるわけですけど、街の中では闇市で通常の何倍も（支払って手に入れていました）。



森重昭氏（筆者撮影）

山口：お生まれになった当時のご家族の構成は。

森：私は長男でございます。7人きょうだいの長男。下に男が2人、女が4人のきょうだいでした。いまは、男は私1人、女性は3人生き残ってしまして、あとは亡くなったんです。原爆が関係したと思われるのが2人いますから、原爆の話をするのは非常に辛いんですよ。たとえば妹はガンで亡くなっている。ところが、一般の人だってガンになるし、区別がつかないわけです。原爆の恐ろしさは、副作用というのですか、後障害と言っているんですか、突然、病気になって、ガン・白血病・心臓病・糖尿病、その他いろいろな病気に突然なって、あっという間に亡くなるケースがずっとありましてね。

祖父は地元で郵便局長をしていました。それ以前は、国のために英語と朝鮮語、中国語の通訳をやっていました。広島市の宮島はかつて国際港だったんですが、祖父は明治から大正にかけてそこに絶えず派遣されていたようです。宮島には当時は外国人がずいぶん入ってきていて、その中にスパイが混じっている可能性が非常に高かったらしい。それで派遣されていたようです。ただ、祖父は僕が生まれた時はもう死んでいましたから、写真でしか知りません。

それから父は、(かつての) 広島空港を作っていたんです²。誰に頼まれたか

² 現在の広島空港の開港（1993年）に伴って広島西飛行場と改称され、現在は広島ヘリポ

と言うと東條英機。爆撃機を広島から飛ばすことができるように、ということで、秘密で作ったんです。東條いわく、これは絶対秘密だから、広島市長も広島県知事も詳細（を口外することを）禁じる、と。父は広島県の土木技師だったので、白羽の矢が私の父にたったんです。滑走路が 1000m×120m くらいの小さい飛行場が吉島（よしじま）にあって、それを作ったのが父。そのあとに、三菱造船の江波（えば）工場もやはり父が一人で作ったんです。それで、もっと大きいものを作れということで父に白羽の矢が立った。ところが、父のことは空港の歴史に残っていないんです。後からそのことを父が私にこっそりと伝えてくれました。佐官を 5、6 人以上連れて、東條英機が広島に 5 回も激励に来たそうですよ。その父は、爆心地から 4km くらい離れている（その空港にいて）幸い助かりました。

それから、母を含め、他の家族は全員防空壕に避難したらしくて、誰もけがなしに助かりました。私の家は広がったですから、庭に防空壕を作っていたんですね。唯一、僕が外にいて爆風で吹っ飛ばされたということですけど。

山口：ご自身が被爆することになった経緯をお話いただけますか。

森：最初は、爆心地から 540 メートルのところにある済美（せいび）国民学校の 3 年生でした。当時は 3 年から 6 年までは集団疎開しなくてはならなかったんですね。ところが私の祖母が私をかわいがってくれていて、爆弾が落ちて死ぬんならみんな一緒に死のうと言い出しまして、私一人が集団疎開に行かなかったんですよ。だけど学校は困りましたよ。私一人のために先生を付けるわけにはいかないじゃないですか。陸軍が作った済美国民学校は、国民学校では唯一試験のある広島一の学校でしてね。「済美・一中・一高・東大」と言われていました。そういうプライドのある学校に通っていたから、他の学校に転校してくれと言ってもおそろくないだろうと学校側は思ったらしい。それで、2 番目にいい広島文理科大学附属国民学校に行かんかと、そこだったら推薦することができるかと先生は言われたんですけど、そんなことをするぐらいだったら、地元の学校に転校しますと言って、己斐国民学校に転校しました。それが、私が生き残った大きな理由になります。分散授業の行われていた旭山神社に行く途中で、爆心地から 2.5 キロのところまで被爆しました。

8 月 6 日というのは夏休みじゃないかと皆さんいうわけですよ。なぜ学校に行

ートと呼ばれている。

く途中でやられたのか、と聞かれるもんですから、当時は「月月火水木金金」といまして、日曜なし、勉強する方も夏休みなしで勉強してたんです。

学校に爆弾が落とされましたら、ふつう、勉強していた先生も生徒も全滅しますね。だからそれを防ぐために集団疎開や縁故疎開に行ったりしてたわけです。で、残った者はどうしたか。これは分散授業と言いまして、寺小屋方式でしてね。年齢がちがう生徒がみな同じところで勉強していた。いちおう学校の組織ですから、毎日 8 時半に行かなきゃいけない。そのちょっと前から、山の上の学校に行くべく橋を渡っていたその時、8 時 15 分に原爆が落ちたわけです。

橋の上を 3 人ほどで歩いていたんですが、僕だけが吹っ飛ばされて川の中に落ち、あとの 2 人は橋の上に残ってその場で大やけどして、のちに死んだと聞きました。

僕は吹っ飛ばされましたが、水草が生えているところだったからクッションになったかもしれません。川の中に落とされてキノコ雲の中です。そこは真っ暗なんです。手の指を顔の 10 センチ前ぐらいに広げて、数えようと思いました。ところが、数えられないぐらい真っ暗。それくらいきのこ雲の中は暗かった。とにかくじっとしゃがんで、30 分くらい経ったのでしょうか。「経ったでしょうか」というのは、時計を持っていませんから。たぶん 30 分くらい経ったと思いますが、目の前がうっすら見えるようになってきました。

川から這い上がると、1 人の女性が私の方に向かって体を揺らしながら、ふらふらふら、今にも倒れんばかりにして、近づいてきました。「病院はどこですか」と言いました。よく見ると、体中が裂けてしまっているんです。全身血だらけ。そして手に何か持っていました。お腹が裂けていたから、胃袋かもしれません。そのときです。頭上で B-29 の音が聞こえた。これはやられるぞと思いましてね。だって僕は、目の前で爆弾が落ちて、それで吹っ飛ばされて川に落ちたと思いましたから、またやられると思って、もうその女の女の人なんか眼中になし、ほったらかしにして逃げました。泣きながら逃げましたよ。

道路という道路には人がいっぱい倒れていました。ふつうだったら、「ごめんなさい、ごめんなさい」といって、人をよけて通るんでしょうけども、その時はその人たちの上を踏んでね、顔であろうと体であろうと、足であろうと、もうとにかく踏みながら、泣きながら必死に逃げましたよ。かなり逃げたところで、「坊や、ここにおいで」という声が聞こえて、と同時に手をつかまれて防空壕の中に引っ張り込まれました。

その前に黒い雨。(原爆投下から) 30 分から 1 時間ぐらい後だと思うんですけど、これもはっきり時間がわからんけど、かなり後になって黒い雨が降った。そ

れもこの己斐を中心に降った。黒い雨はね、普通の雨とは違うんですよ。雹が体に当たったら痛いでしょう。黒い雨は、当たると痛かったんだから。自分が着ている服が真っ黒になったもんですから、もう脱いで捨てました。上半身裸ですよ。

後でカール・セーガンというアメリカの博士が、「今度核戦争が起こったら地球が氷河期になる」と言いました。みんなそれは大げさだといったけど、知らない人がそう言うんであって、僕に言わせたら大正解ですよ。なぜか。あの8月の暑い日にですよ、上空1万5000メートルのキノコ雲が発生して、あれ長い間消えなかったですよ。あれは中が真空ですからね。あの中に僕はいた人間ですからわかるけども、地上にあるありとあらゆるものを吸い込んで引っ張りあげられたんだから。真っ黒になったために、太陽光線がシャットアウトされて、あつという間に温度が下がりましたよね。僕は温度計を見たわけじゃないけど、たぶん10度は下がってましたよ。

山口：いわゆる「核の冬」という議論ですね。それを実体験された。

森：そうそう。僕は上半身裸なんです。寒いんですよ。きよろきよろしましたらね、新聞紙が落ちてました。それを拾って体に巻き付けました。そしたら少し落ち着きましたよ。たった新聞紙一枚ですけど。

夜になったら広島市が火の海。明るいですよ。新聞を読んだわけじゃないけど、(体に巻いていた)新聞の文字が読めましたよ。それくらい明るかったということです。一晩中燃えてましたね。2日半ぐらい燃えたんじゃないかなあ。そのあとでみんな言ってましたよ。汽車から広島駅に降りると、目の前に似島(にのしま)があったっていうんですよ。似島っていうのは、ずっと向こうの広島湾の中の孤島ですよ。普通だったら絶対見えることはない。ということは、広島市は全部焼け野原になったということです。

一番つらかったのは、水がないこと。黒い雨が降った水を、上の黒い部分を除いて、夢中で飲みました。放射能のためにどれだけ体に悪い影響があったか誰も気づかないままに、みんな飲みました。僕も、それを飲んだおかげで、それからこうして73年間も苦しむんですけどね。池にいたフナやコイもお腹を上にして死んでいました。それが何を意味するか今だったらわかるけど、当時はわかりませんでしたからね。

山口：ご自宅はどうになりましたか。

森：半壊でいつ崩れるかわからない状態でした。怖いんですよ。それでトタンを1枚拾ってきましてね、山の斜面にこういう風にして、その下に寝ていたわけですよ。あれ、3カ月ぐらいいたかなあ。

山口：原爆の後ご家族と再会されたのは。

森：4日目ですね。そしたら母が「生きてたの？」と言いましたからね。そのとおりです。生きていました。それからは生きるのが大変でしたよ。原爆が落ちるまでは、配給がありました。食料、医療品、服飾、量は少なかったけども、生きるだけの最低限の食料はあった。ところが、原爆の後は、いっさいそんなものがなくなった。それがどんなに苦しかったか。朝から何にも食べるものがないんですからね。今だったら水でも飲むんでしょけど、水道もストップしている、電気もストップですよ。どうします。考えることはひとつです。

泥棒なんかは、倫理観があるから今じゃしませんよ、誰だって。だけど僕はそのとき思ったな。生きるためにはね、泥棒なんて悪いと思わんぞ、と。どうしても生きてやるぞと、そう思いましたよ。家はほとんどつぶれていたり、人がおったりして入れませんから、泥棒といっても、あのとき一番狙ったのは柿ですね。それから、生きているものはみな狙いましたよ。一番はヘビ、ネズミ、そういうものを目の色変えてつかまえて、焼いて食べました。他の人は何をしていたかという、鉄道草といって、ぺんぺん草というんですけどね、それを粉にして団子にして食べたようですけど、とても食べられたもんじゃないというのがみんなの意見でした。僕はそっちの方は食べなかったけど、ネズミはおいしかったよ。カエルもまあまあおいしかった。いちばんおいしくなかったのはヘビだった。そんなものを、とにかく生きなきゃいけないから。ああ、それから、虫も食べたなあ。キノコにもいろんなものがありましてね。それが食べられるかどうかかわからないんですよ。今だったら植物辞典かなんかで調べることができるんですけど、当時はそんなものないからね。こう、見ましてね、色がついているものは食べなかった。逆に色がついていないものを食べて、僕は正解でしたね。他の連中は色がついているものを食べて下痢をしたりひどい目に遭ったりしたけど。

真夜中にね、懐中電灯持って山に入って、まったけをとるわけ。子ども同士で行くんですから、何人も一緒に行くんですよ。ある日、猟銃で撃たれましたよ。これはいけんというので、すぐ電気を消して、もう必死になって逃げましたよ。地主にしたら、自分の大切な大切なまったけを取られるんですからね。許しちゃいかんと思ったはずですよ。

山口：じゃあ、意図的に、当てるわけじゃないけど、警告でってことですね。

森：たぶんね、そういう風にしてくれたと思ったけど、撃たれる方はそんなことはわからんから、とにかく当たったら命がなくなると思って、逃げに逃げた。お互いに生きるために必死でしたね。

当時、山陽本線が（原爆投下後）すぐ動き出した。焼け跡で切符を売っているわけですよ。切符を売るのに、お釣りがあるじゃないですか。お父さんやお母さんや兄弟が全部原爆で亡くなっている浮浪者がね、（乗客が）切符を買って、お釣りを出した、その本人が手を出すよりか早く、キップとお釣りを取って逃げるんですよ。僕はそれを聞いて、それは当たり前だと思いましたよ。だって餓死者がいっぱい出たんだから。他の人に頼ろうとしても、そういう子どもは受け入れませんよ。自分の子どもで精いっぱいだから。だから、そういう子どもたちは、悪いことをしないで黙って餓死するか、悪いことをして生き延びたかどっちかですよ。だから僕は悪い人たちを決して悪いとは思わなかった。倫理観なんてものはまともな世界で言えることで、原爆が落ちてみんなが生きるか死ぬかというときには倫理観なんてなくなるぞと、そう思いましたよ。だから戦争をしちゃいけないんですよ。

それから、みんな知らんことをひとつ言っておくけども、自殺者が一番多かったのはこの己斐ですよ。爆心地に近いところで生き残った人が、（少し離れた）己斐を目指して逃げてきた。ところが、やっと逃げてきても、誰も面倒見てくれません。体が弱って、次から次に死んでいくんです。道路でみんな死んでしまって、通れないんですよ。僕の父親は組長でしたから、「組長さん、道路で人が死んでしまって通れんから何とかしてください」いうて、苦情が出るんですよ。だから父は、大八車に死体を載せて、初めは学校に行っていたけど、学校もいっぱいだから、ついには川に捨ててに行ったようです。

僕は川の方は見ていないんですが、山陽本線の線路が曲がっているところに自殺者がいっぱい出ているのを見たんです。最初はマグロが並んでいるんか思った。胴体がみな切れているんですよ。そんなのが何十も並んでいるんですよ。

山口：そこで汽車に対して身を投げるわけですか。

森：うん。ごとごとごとと列車が来たら、線路の上に体を投げて、体が真っ二つに切れるように、寝転がったらしい。そんなのひとつやふたつじゃないんです

よ、ずらーっと並んでいる。それも毎日。僕は、生きるために毎日どうしたかといいますと、釣り竿を持って川に釣りに行ってたんですよ。そうしないと食べるものないから。その川に行く途中が線路ですから、そこにそういう遺体がずらーっと並んで。その遺体が、原爆に遭っているから黒いんですよ。その話をある人にしたら、その人が言ったのは、汽車が来る前に線路にちょっと首をこうやるんですよ。そしたら、そこを列車が轢いてくれるから、ちょうど首がころんとギロチンのように落ちていいんだよ、って平気で話をしてくれましてね。ああ、人が死んだら気の毒でこういうことがあっては困るというような話をするのではなくって、いかに気持ちよく死ぬるかという話をしたのを覚えています。死というのは、今だったら大変なことなんだけど、当時は日常茶飯事。死は隣じゃないです。死は同時に起こっていたように今じゃ思います。

山口：今おっしゃったのは、原爆投下から数カ月以内ぐらいのお話ですか。

森：いや、1カ月以内だったと思う。

山口：しばらくは山の中でトタンを敷いて過ごしておられたということですが、ある程度経ってからご自宅に戻ってこられるわけですか。

森：トタンどころか、夏だったからできたことで、冬だったらとてもできません。親の方からすれば、掘っ立て小屋でも何でもいいけども、屋根がついて、寒さをしのげるようなものを作ろうとしたらしい。

山口：学校に戻られたのは、どのくらい経ってからですか。

森：1カ月のちから始まったんですけどね、それは建前ですよ。本当に始まったのは、次の年の新学期ぐらいからだったと思います。だってね、生徒という生徒が、みんな原爆で家をなくしているんですよ。それじゃあ、そういう人がどうするかというと、学校に寝泊まりするんです。学校が家の代わりになっちゃった。学校も、それじゃ困るから追い出しましたよ。何月何日から授業を再開しますから、どうぞお引き取りくださいと、だけど行くところないじゃないか、というわけですよ。学校の方も、ついに、草津国民学校をそういう人たちを収容する学校に特別に指定しましてね。そのうちに、みんながバラックを作り、移動していつ、すこしずつ改善していきました。

僕も（再開した）学校には行ったけど、勉強なんかするような雰囲気じゃなかったし、第一、窓が全部ないんですよ。吹っ飛ばされて。生徒は腹が減ってね、だって朝から何も食べてない、昼も何もないんだから。とにかく僕は食料を調達するためにどっか行ってたね。それから、しばらくするとララ物資が始まった。とくにアメリカから脱脂粉乳が来たから。それはありがたかったです。今じゃとてもじゃないが臭くて飲めたもんじゃないけど、当時はそれさえなかったんだから。

ジョン・ダワーの『敗北を抱きしめて』という本があるけど、あれがなぜ売れたか。原爆が落ちた時のことは、もう何千人も体験記に書いていますよ。だけど、その後のことはみんな書いていないから、文献のうえでも一番欠落していると思う。

2. 国民学校が遺体焼却場に

山口：己斐国民学校の様子をもう少し教えていただけますか？

森：校庭が今は1面しかないんですが、当時は2段になってましてね。教室から上の運動場に遺体を次から次へと、亡くなるたびに引っ張り出すわけですよ。ズルズルになっていましてね、遺体が。だから皆さん持とうと思っても滑って持てなかった。魚と同じように、とび口で遺体の首やらを突き刺して引っ張って出した。それから手足を2人で持って、遺体を山のように積んでおりました。ところが、焼くもの、薪がないんですよ。それでどうしたかという、校長先生が生徒に「遺体を焼くから、学校の周りの家に行って、薪になるものを学校に寄付してくれと頼んでこい」と。当時の家は壁が板なんですよ。それを引っぺがして持って来いと。持ち主がいる家ではどんどん持ってこられたんだけど、ほとんどの家が誰もいません。だから持ち主に断りもしないで勝手に泥棒して帰ったというのが実情です。校長先生が泥棒してこいって言うたのは、おそらく初めてで終わりだろうと後から言うておりましたけど。

遺体を皆さん調べていたんですよ。遺体はまん丸く太ったような形になって、真っ黒だし、男女の区別もわからない。年を取ったのか、若いのかということもわからない。だからみんなどういう形で遺体を自分の肉親だと特定したかという、当時は金歯が頼りだった。だからみんな口を開けて調べていました。

それと私が一番気になったのは、遺体が動くんですよ。動くということは、まだ生きていたんじゃないかと僕は勝手に解釈したんですよ。「生きてるじゃない

か」とよっぽど言うてやろうかと思ったんだけど、僕は子どもだったし、大人が何というかわからんから、黙っていましたけど。もちろん、虫の息ですよ。だけど、生きていた人がいたのは間違いない。動いていたから。だけど、もうとつても、自分の上に乗っている遺体を跳ね上げて、自分が生きているということを周りでしゃべる気力はなかったと思う。とにかく、危篤寸前で、まだ息のある人がそのなかに何人かいたということは、はっきり言えます。

教室の中で次々と人が死ぬもんですから、死んだらそれを外に出したい。けども、教職員にはそんな体力もなくて、校長先生が部下の先生に命令しましたよ。兵隊に出動してもらえと。それで来たのは75名。こここのところは正確に聞いてますからね。学校のそばにあった大きな家を借り上げて、そこに75人の暁部隊の兵士を連れてきて、次から次へ死んだ被爆者を校庭に出して、焼却していったということですね。兵隊が上半身裸になってマスクして、朝から風呂を沸かすんですよ。一斗樽を準備して、その酒を口に含んで、酒の勢いで遺体を運んだと。遺体は腐臭化しまして、それを画いた人に言わせると、地獄だと。校庭に穴を掘って、頭と足を交互に並べていって、その上に生徒が集めてきた燃えるものを燃やして、焼いていった。ところが焼け残ることも多い。そうしたら、夜、野犬が出てきて、焼け残った遺体に食いついた。それを見た人が怒って、猟銃で射殺すると息巻いて、犬を追いかけたということも聞いています。犬も食べるものがないから、必死になって。元々は家で飼ってた犬ですよ。人間さえ食べるものがなかったんだから、ましてや犬に食べるものはない。

そういうふうに、普通だったら人を焼くようなところじゃない運動場が、死体焼却場になった。そこではたいへんな悲劇が次から次に起こった。夜になると、(誰かが)死体をまさぐるんですよ。当時は今とちがって、財布とか判こ、そういう貴重品を全部体に括り付けていまして、(遺体の)上から触って、そういうものを盗むんですよ。盗んだのは、子どもとか大人じゃなくて、おばあさん。そのおばあさんもついに捕まりまして、警察に連れていかれて、大説教を食らったんですけども。署長が言うたそうです。「この人らも生活に困っていてこういうことしたんだから、今回だけは許してやれ」と。

僕自身は、焼く前の遺体の山、これは見た。そして、次に見たのは、焼いた後。焼いた後に、校庭全部が、なんというんでしょう、骨とかいろんなものが混ざった灰——灰といったらちょっと違うんだけど。木のようなものを焼いたんじゃない、遺体を焼いていますからね、着ているものもきれいに焼けていないし、いっぱい、いろんなものが残っている、そういうがれきのようなものがあって、それがものすごい量であったと。

己斐の国民学校には周りに桜の木が植えてあったんですよ。今もありますけど。最初は桜の木の根元に穴を掘って遺体をどんどん放り込んだと言うていたけど、量が多すぎて、ついには校庭に大きな穴を掘りだして、そこに遺体を次々と運び込んで焼いた。その後のことですけどね、翌年の春、見たこともないほどきれいな桜が咲いたんですよ。そのときに遺体を運んだ警防団の団長が僕に向かって言いましたよ。「きれいな桜が咲いたなあ。なんでか知ってるじゃろう。肥料が違うからなあ」と。人間の遺体というのは肥料にしたらこんなに美しい桜が咲くもんかと思いましたね。それは悲しい現実ですけど。

山口：焼かれた死体の数が広島原爆戦災誌には「800」と書いてあるけども、森さんは、それは違うんじゃないかと不審を持たれるわけですよ。

森：学校の講堂に、広島にいる軍の中でもトップクラスの優秀な人たちが詰めておりましたね。その人たちが遺体を全部数えているんですよ。なぜ数えたかといいますと、遺体というものを勝手に焼くわけにはいかない。全部検死がいるわけ。しかし検死するための医者がいない、じゃあどうするか。そこで勝手に焼くことにしたんですけど、あとから追及されたときに校長が困ると思ったらしい。そこで、廿日市の警察に頼み込んだら、もう校長の権限で焼きなさいと言うたらしい。軍人の中に、遺体を何体焼いたか数えていた人がおりましたね。その人を13年かけてついに探し出したんです。青森にいましたよ。電話したら、「私の父が該当者だけども、残念ながら父は亡くなりました」と電話口に出た人が言いました。それから3年経って連絡があって、「(父が書いたものが)見つかりました」と。そしたら、「2300名」と書いてあるんですよ。こういう活動を地道にやらんと、歴史というのは、間違っただけを後世に残されたらたまらんと、僕はそう思ったもんですからね。その甲斐があったということです。

山口：森さんが死体の数にこだわられた理由は何だったんでしょうか。

森：あんまり言いたくないんですけども、ある母親が、もう二度とこういう戦争のない世の中に生まれて来いよとって、子どもを茶毘に付していた。一番死んでほしくない娘、きれいなきれいな娘、それを焼く気持ちというのはどんなもんだらうと、僕はそう思った。だから、数にこだわったんですよ。

山口：そういう調査はいつぐらいから始められたんですか。

森：原爆を体験したのは8歳の時なのですが、38歳になった時、30年のちですよ。ある日、決心しました。僕の目の前でたくさんの人が焼かれた。でも、さっきの2300という数字よりも、もっと大きい話も聞いているんですよ。自分が小学校の高学年になったころだと思う。とにかく寒い日でしたから11月ぐらいだろうと思うんだけど、校庭の隅に1本の木で作った慰霊の碑があって、そこで朝鮮の人がアイゴー、アイゴーというて、5銭をそこに供えて、いつも拝んでいた。そこで私が聞いた話ですけど、大人がひとり、「たくさんの人を焼いたなあ」と。もう一人が「何名ぐらい焼いたんだろうか」と言いましたら、最初の方が「約2万」と言ったんですよ。私はそれを聞いて、腰を抜かさばかりに驚いた。だって800でも多いと思っていたのが、2万というのは多すぎるじゃないかと。だけどこれは、警防団どうし、実際に遺体を扱った人が「2万」と言ったんだから、どれが本当なのか確かめてやろうと思いましたよ。

それで、あらゆる公文書や書かれたものにもあたるんだけど、私が一番重視したのは、実際にそれを見たであろう人。学校の周りに住んでいた人を一軒一軒歩いてやろうと、その時思った。私の家は幸い、己斐で一番有名な家でした。郵便局長をしていたおじいさんが大変な人格者であって、絶対に私は信用されるだろうから、聞いて歩こうと思いました。そうしたら、8月7日にここで300焼いた、ここで200焼いた、ここでいくら焼いたというのがあちこちに出てきてね。それから、己斐の隣に高須と言うところがあるんですけど、そこで5000人焼いたとか、ちゃんとした公文書に書いてある。そういうのを全部足していくと、己斐町の周りも全部入れて2万になったんですよ。これ、嘘じゃないか、あの話は正確だったと。

僕はこれでもね、被爆者調査を1000人以上やったのは日本ではおそらく私しかいないと思っています。広島でも長崎と同じく原爆戦災誌を出していますが、原爆から20何年も経ってから出ているものですからね、けっこう間違いがあるんですよ。それで間違いを市にずいぶん指摘しました。そうしたら、「実は、あなた以外のところからいろんな指摘を受けた。訂正を含めて改訂版を出すからぜひ協力してほしい、資料の提出をお願いしたい」というわけですよ。私も喜んで協力さしてもらいますということで、必死になって調査をやりました。広島市内、一軒一軒尋ねまわっているいろんなことを聞きました。

ところが、広島市は改訂版を結局出さなかった。理由は、お金がない。長崎は立派な改訂版を出しています。それを聞いて、残念でねえ。広島は、原爆ドームを残そうということになって募金を集めたら、すいぶんお金が集まりましてね。

そっちの方を戦災誌の改訂版を出すのに少し回してもらったらいんじゃないかと思ったんだけど、目的が違うからということで出してもらえずに、結局今まで改訂版は出していません。

3. 被爆米兵調査へ

山口：森さんの行われた被爆者調査の中で最も有名なのが、広島で被爆した米兵の調査だと思いますが、どのようなきっかけで始まったのですか。

森：僕は、(己斐の調査を通じて、) ちょっとしたことを聞いておっても、それを丹念に追求していったら、いろんなことがわかってくるぞと(思うようになった)。その中の一環がアメリカ人(の調査)だったわけ。初めからアメリカ人を探したわけじゃない。

きっかけはいろいろあって、僕の隣のうちのおばあさんが「アメリカの飛行機が自分の家に落ちてきた」ということから始まりましてね。「飛行機が落ちたらいっぱい破片が散らばるはずだけど、何もないじゃないか」といったら、ここにまさにぶちあたるぐらいに降りてきて、それから飛行機が上がって、向こうの尾根を通過して向こうに行ったという。それで、当時はバスがなかったから歩いてずっとあの山を越えていったんですよ。僕はそこでお百姓さんに言いました。「おーい、原爆が落ちる前にここにアメリカの飛行機が落ちてきたのを知ってますか」と聞いたら、なに、知っているどころか、俺は竹やりを持って行った、俺は斧を持って行った、俺は日本刀を持って行ったと。いっぱい、それも51人もいた。現場に行ったら、遺体が散乱していたというんですよね。1人だけは完全に遺体だったけど、あとは手足がちぎれてね、何人の人が死んでたか、わからんというんですよ。とにかく、米軍の飛行機が落ちたのは間違いない³。

それから、これは私だけの特別の理由ですけどもね、私が疎開前に通っていた済美国民学校の校長先生が第二次の集団疎開で生徒を連れて、なんと8月5日に、広島から60キロ離れた三次(みよし)に行かれたんです。そしたら、翌日、原爆。とにかく、爆心地から540メートルの学校は全滅した。1年と2年は学校に行っていましたから、全滅した。先生も職員も、とにかく一人残らず生き残っていない。とにかく、すぐ帰ってくれということで、帰られたそうです。すると、

³ 森氏が言及しているのは、1945年7月28日に広島市佐伯区の山中に墜落した米陸軍爆撃機B-24「タロア号」のことである。同機は、僚機と共に沖縄の読谷飛行場を飛び立ち、瀬戸内海に停泊していた日本艦隊に空爆を加えるが、日本軍によって撃ち落とされた。

数日前まで自分と一緒に教えていた先生も生徒もぜんぶ真っ黒焦げになって、学校全体もなくなっていた。その中になぜか、アメリカ人の遺体があった。それを後日記念誌の中に書かれているんですよ。それを読んでね、待てよ、これは他人事じゃないぞと。僕がもうちょっとぐずぐずしていたら、学校に残って被爆して死んだに違いない、米兵と同じ運命をたどったに違いない。そう思いましてね。

それからだいぶ後になるんだけど、峠三吉の『原爆詩集』の中に「墓標」という詩があるんですよ。私が行っていた済美国民学校に墓標があったという詩なんです。これはもう、僕のことを書かれているのと一緒にじゃないかと、詩を読みながら感じまして。それから、太田洋子も、「山上」という小説に、タクシーの運転手が「自分は相生橋の近くで米兵がいるのを見た」と言ったということを書いています。

済美の校長先生はひとりの米兵のことしか書いていないけど、まだ他にもいるらしい。済美国民学校の隣が中国憲兵隊司令部で、そこに米兵がどうやら留置されていて、みんな原爆で死んだと思ったら、ひとりだけ生き残ってしましてね。それが相生橋に連れてこられたという例の有名な話につながるんですけど。

山口：具体的には、被爆米兵のことをどうやって調べていったのですか。

森：NHK が集めた 2225 枚の「原爆の絵」があって、劣化するから今は絶対見せてくれませんが、当時は見せてくれた。（絵が寄贈されていた原爆資料館に）かなりの日数行ってそれを調べましてね。そしたら、その中で 25 枚か 26 枚か、アメリカ兵に関することが書いてありました。アメリカ人がまちがいなく広島にいたということを、とくに相生橋を中心に描いてあったんです。

文献がたくさん広島にあって、その米兵が初めから相生橋にいたという書き方をしていますけど、そうじゃないんですよ。連れてこられた。なぜそう断定するかというと、連れてきた憲兵が書き残したものがあるんです。（その憲兵は）米兵の中の 1 人が中国憲兵隊司令部の中で生きていたので、宇品の陸軍病院に連れて行こうとした。

憲兵隊司令部には、その米兵と、19 人ほど日本の憲兵がまだ生きていたそうです。虫の息ですけど。それを、相生橋から 5 キロほど離れた宇品に舟で連れて行って看病しようとしたところが、たまたま干潮でしてね。しかも材木やら遺体やらが川の中に流れ込んでいて舟が入らなかったそうなんです。翌日も舟が入るような状況ではなかったから、トラックで迎えに来たと。米兵の方は後ろ手に縛っていて、うなだれたような形になっていたから、たぶん死んだんじゃないか

とあって、そのままにして自分は宇品に行ったと。

山口：相生橋のところにいた米兵は広島市民によって虐殺されたという噂があって、どうやらそれは事実ではないらしいというのが森さんの推定ですね。

森：アメリカ人は相生橋のところで虐殺されたことになっていまして、それを下手に言ったら（占領軍から）処刑されるとみんな思っていました。あとからいろいろ聞いたら、証言するのを拒みましたよ、どの人も。でも、大切なことだからぜひ協力してくれと、ありとあらゆる人に相生橋に出てきてもらって、話を聞いた。僕一人が聞いたんじゃ、嘘を言われても困ると思ったから、ぜんぶマスコミを入れた。その結果、間違いなく、相生橋には1人ないし2人の米兵がいて、そこで死んだということだけはわかりました。

その米兵がその後どうなったか皆さんあまりご存じありません。実は、（今の）原爆ドームの前にあった自転車屋のオーナーが、ドームの前の岸辺に穴を掘って、米兵を埋めていたんですよ。2年後、遺体を埋めたご本人が、掘り出した遺体を焼き直し、遺灰にし骨壺に入れて、（のちに）平和公園（になる場所）に持っていった。それで、広島別院に電話して「供養してほしい」、と言ったそうです。

そのとき思ったんですよ、名前はどうか。すると、名前が過去帳に登録されていないことが分かった。これは長崎も一緒だと思うんだけど、広島でも原爆で死んだ人の1年間の名前を（市が）過去帳に書いています。それを写真に撮ったり、マスコミに公表したりすることは今はできません。でも昔はOKだった。

過去帳に名前はなかったけれども[この米兵（アトキンソン軍曹）については、後に森氏が申請して過去帳に登録された]、30年前くらいに読売新聞に相生橋の米兵についての記事が出た。新聞もやっぱり裏を取ったわけです。どうやって取ったかという、中国軍管区司令部の調査。

山口：戦後になってから行われた調査ですか？

森：そうです。日本が占領されたあと。GHQに言われたのか、自主的に調べたのか、定かじゃないけど、とにかくこれはやばいぞと。というのは、自分たち（日本人）が（相生橋の米兵を）殺したということになったら、ただでは済まん、死刑になるとみんな思ったらしい。それで一生懸命調査したということです。

山口：森さんご自身がひとりひとりの被爆米兵を特定されていったわけですが、調査のとっかかりになったのはどういう部分だったのですか？



米機タロア号の残骸（森氏所有、撮影筆者）

森：山口県に墜落した米機「ロンサムレディー号」の機長が幸い生きておりましてね⁴。ところがこの機長は、部下の動静を知らなかったんですよ。その後、最初に見つけたのはある爆撃士でした。幸いなことに、お兄さんが生きていますね。被爆死した弟のことについて語ってくれた。

特定はしましたが、実際に死んだかどうかわからない人も中にはいました。だけど、私が勝手に殺すわけにもいかない。それでどうしたかという、肉親に証明してもらったんです。誰々さんはどこで、どういう風にどこで亡くなりました、その証拠はこうだと2つも3つも出しました。他方では飛行機と一緒に墜落死したという説があります。どちらか、あなたが決めてください（と肉親にお願いした）。

たとえば、Dという米兵がおりました。この人はタロア号といって、広島の日市（広島市佐伯区）に落ちた飛行機のパイロットです。タロア号は被弾して、煙を吐きながら落ちていったんですけど、その周りには、まさに怪我をした子どもの鳥を親が見守るように、味方のB-24がずっとついていきましたね。タロア号から飛び降りていく米兵を見ているんですよ。最後に飛び降りたのがDだった。飛び降りた飛行士は全部で5人。2人は逮捕されて、中国憲兵隊司令部に連れていかれた。1人は今の西飛行場（広島ヘリポート）があるあたりの海に落ちた。それを見ていた漁民が漁船を出して、あっぷあっぷしながら浮かんでいた米

⁴ ロンサムレディー号は、タロア号と同じ攻撃に従事していて、1945年7月28日に山口県伊陸（いかち）の山中に墜落した。

兵を漁船の竿でぶんなぐって、三菱の工場の方に引き上げた。もう 1 人の米兵は、三菱の工場の屋根にパラシュートで降りてきた。実際には高射砲の弾に当たって重傷を負っていて、とても生きておれないくらい出血していた。それをなぜ知ったかという、三菱の病院長が検死しているんですよ。今の 2 人は結局亡くなったものですから、広島駅の北の国前寺（こくぜんじ）というお寺に埋葬されてました。この人たちが葬られているところは十字架があったからすぐわかりました。

問題は残りの 1 人です。D というパイロットは最後に飛び降りた。そこまでは、アメリカ人も見ておるんですよ。そこからが僕とは見解がちがう。アメリカの方は、飛行機と共に落ちて D は死んだと思ったらしい。

僕は毎日牛乳を取っているんですが、その配達する人が現場を見ておりましたね。米兵がパラシュートで降りてきて、松の木に引っかかったというんですよ。首をがくと垂れて、死んだようになっている。もう何時間もそのままになっていたから、当然これは死んだと思われたらしい。竹竿に鎌を括り付けてパラシュートの紐を切り、米兵を下したんだそうです。そしたら、息を吹き返したというんですよ。それで、中国憲兵隊に連れていかれて、尋問を受けたらしい。8 月 5 日に米兵が尋問を受けたという記録を、GHQ が作成しているんです。

その尋問をしたのは、東田和四という人。D らしい人は、「私は学徒兵です」と言った。飛行服のポケットから、美しい女性の写真を引っ張り出してきた。その写真を見せながら、これは私の恋人ですと言うたらしい。東田憲兵が「何か困ったことはないか」と聞くと、「毎日蚊に刺されて困っている、なんとかしてほしい」。それで、東田さんは、中国憲兵隊司令部の担当の人に蚊取り線香をつけてやってほしい、と言ったんだそうです。

D は、私はたぶん生きてアメリカに帰れないだろうと、通訳に言っているんですよ。それで、トイレトペーパーに自分の名前と住所を書いて、私の両親にこれを渡してくれと通訳に言ったそうです。ところが通訳は、私にそれはできない、憲兵隊の組織で捕虜の名前と住所を書いたようなものを持っていたら、即、処刑される、だからこれをあなたの郷里のご両親に渡すことはできない、こう言ったそうです。D は涙を流しながら、へたりこんでしもうたと。けども、その通訳さんは、よっぽどそれが気になっただけで、あ那时的捕虜の話アメリカの両親に伝えてやりたかったと、こう言っているんですよ。

山口：森さんは、そういう風にして、ひとりひとりの米兵の死を追究していったわけですね。

森：そうやって、どこで何名の米兵が死んでいったかを数えていきました。すると、12名いたことがわかった。ひとりひとり、どの人がどの飛行機に乗っていたかということまで追究していった。もしアメリカ側がいうように、Dが飛行機と一緒に墜落して死んだとしましょう。そしたら、こちらも聞きたい。その時に尋問した相手は一体だれなんだと。(広島市内にいた)アメリカ人は、原爆でまちがいなく全員死んでいるんですよ。だから、名前はDじゃないとしても、アメリカ人はもうひとり死んでいて、12名死亡は間違いないというのが僕の主張なんです。

山口：12人は全員、国立原爆死没者追悼祈念館に登録されているのですか。

森：登録しました。ただし、元々申請書を書いたのは遺族です。僕は代理です。

これまでの調査は、口で言うほど簡単じゃなかったですよ。でも、できるだけのことをしようと。なぜそこまでしようと思ったかと言うと、僕がこれを言う相手は、死んだ米兵の遺族ですからね。間違ったことを言ったら、下手をしたら裁判に訴えられるかもしれないと思った。それぐらいだったら言わない方がいいんだけど、そこをあえて言ったのは、一生懸命調べて、正確な情報を伝えようと思ったから。だから僕の気持ちを皆さんよく理解してくださって、私がやったことに対して喜んでくださった。最初は遺族だけが喜んでくれるかと思ってやったことですが、最後にはオバマ大統領まで評価してくれた。

僕は、悪く言われる可能性がずいぶんあった。あなたは本当は見えていないはずなのに、いかなる証拠に基づいて被爆米兵がこういう風に死んだと言えるのかと。だから僕は言いましたよ。これをひとつ書いたり言ったりすることに、どれだけ時間を費やして証拠を追究していったか、わかりますか。私はこれに何十年もかけているんですよ。

4. オバマ大統領の広島訪問⁵

森：オバマ大統領は献花式の後の有名なスピーチで2回も僕のことにも触れてくれてね。僕をそれを聞いて涙が出た。(スピーチの後で)大統領が長い手を伸ば

⁵ オバマ大統領は、2016年5月27日、現職の大統領として初めて被爆地・広島を訪問し、平和の碑の前で演説を行った。森氏は、このスピーチに米政府から招待された数少ない日本の市民の一人である。

して僕を自分の方に引き寄せてくれた。一言も大統領はおっしゃらない、僕も何も言いません。でも、気持ちに通じた。今年（2018年）の春、オバマ氏がたまたま東京にいらっしゃったらしくて、どっかのマスコミの人が聞いたら、僕のことをよくご存知でした。単なる思い付きでみんなの前で手繰り寄せたんじゃない、僕に感謝の気持ちを込めてして下さったんだと思ひまして、うれしかったですけどね。

アメリカにこの度行ったら⁶、1人か2人はきっと、僕に反対のことを言うんじゃないだろうと思ったけども、全員が僕のやってきたことをすごく評価してくれてね。最後にもらったのは本物の星条旗ですからね。星条旗と言うのはよっぽどの人じゃないと差し上げないそうですよ。

山口：米兵が、仲間の原爆攻撃によって亡くなるという冷酷な事実があるわけですね。そのことをアメリカ人が知ることにはどういう意味があるとお考えですか。

森：それをね、アメリカが一番恐れたらしい。僕があれだけ長い間調査研究をやってわかったけども、アメリカはそれを非常に怖がった。

山口：「アメリカ」というのは、政府のことですか。

森：政府が国民に知られること。日本人も含めて、連合軍の捕虜も若干いる、そういう人たちにそれを使った、それも2回も使った。それをアメリカ軍やアメリカ政府は自国の人に知らせたくなかった。今日はね、どうしようかなと思っただけど、その証拠をひとつ、あなたにあげます。玉川忠太先生のことです。

原爆当時、広島県立医学専門学校の教授だった人です。（被爆者から）血便が出た、脱毛した、下痢をした、当時生き残ったお医者さんは赤痢だとかいろんなことをいいましたけど、それを調べるのはどうしたらいいか。病理解剖しかなかったんですよ。それを玉川忠太先生がしようとしたら、アメリカからストップがかかった。アメリカは直に言ったんじゃないかって、広島県庁に解剖の許可を取りに行ったら、ストップをかけられた。そんなことを言ったって、病理解剖しなきゃ本当の原因はわからんじゃないか。で、反対を押し切って、わずか19例です

⁶ 森氏は2018年5月、79歳にして初めての訪米を果たした。現地では、被爆米兵慰霊碑の除幕式への参加、森さんの活動を主題とした映画『ペーパー・ランタン』の上映会、コロンビア大学等への訪問、国連での演説など、多忙な日々を過ごした。

けども黙って解剖したんですよ。それを聞いてどうなった。メモまで全部、アメリカが持って帰ったんですよ。それを公表さしてくれなかった。玉川忠太先生もよっぽど悔しかったらしい。この先生の気持ちよくわかりますよ。

アメリカがやったことはね [原爆投下のこと]、戦争だからしょうがないとは思った。人を殺すのが戦争だったら、人を殺さなかったら自分が殺される立場になるんだから、そこんところは言わないけども、せめて、人が発表することだけはストップしてほしいな、と。

山口：5月の渡米では大歓迎だったということですが、なぜでしょうか。

森：アメリカ軍やアメリカ政府が悪いと僕が言ったら、決してああいうようなことにはならなかった。遺族に、人間として原爆の恐ろしさを伝えて、あなた方のおかげで戦争が終わって平和になった、あなた方は英雄なんですと、そこを強調したんですよ。戦争で死ぬことは本人は望んでなかったはずけども、苦しんで苦しんで、戦争が終わっていま平和が来ているんだから、この平和をこれからも続けなきゃいけない、そうしたら原爆で死んだ人も浮かばれるであろうと、そういうふうな仏教的な話になったかもしれないけど。アメリカ人は、「原爆で日本人をたくさん殺した」と僕から非難されるかと思ったら、まったくそれには触れないで、そういうふうに方向を変えていったので、評価してくれたんだと思います。

山口：森さんが実際にアメリカで会われた人たちは、アメリカが日本に原爆を投下したことそのものについては、どう考えていたのですか。

森：そのことは誰もおっしゃいませんでした。僕も聞きませんでした。

山口：ニューヨークの国連本部でもスピーチされたとか。

森：いま、国連には194カ国加盟してるんですね。そのうち、174カ国の方が僕の講演を聞きに来てくれました。「皆さんは核を廃絶するために大変な努力をなさっていることは知っているけども、1カ国だけそれに成功した国がある。それは、南アフリカ共和国である。南アフリカは、6発ほど原爆を持っていたが、廃棄して平和な国になった。これを皆さん見習おうじゃないか」と。そう締めくくったんです。そしたら、たくさんの聴衆の中からひとりが僕の方にすっ飛んでき

た。「よく言ってくれました。私は南アフリカの人間です」。そうって、僕の手を放さなかったよ。

こないだ、トランプ大統領ですか、INFを破棄するというたけど、これだけみんな苦勞して核を減らすために頑張ってきたのに、冷戦がまた元に戻ったじゃないかと。平和というのはやっぱり大変じゃなあ。核廃絶はみんなひとりひとりが考えなきゃいけない。上のもんだけに任せるべきじゃないと、僕は強くそう思っていますからね。